一般部門

応募歌数　八八一首

最優秀賞

白菊の綿にくるまれひと眠り不老長寿になってしまった

渡辺晃子（新潟県魚沼市）

選者賞（大下一真 選）

そのむかし海だったという記憶あり草はら時おりさざ波寄せる

牧　恵子（埼玉県川口市）

選者賞（水上比呂美 選）

山古志の青葉若葉の照る五月牛の角突き初場所が成る

山崎とし子（新潟県新潟市）

魚沼市長賞

ミサイルのようなボンベを積みて来ぬガス検針の雨合羽着て

強瀬忠昭（埼玉県深谷市）

新潟日報社賞

戦争を廊下の奥にあらずして廊下の前に立たすプーチン

庭野治男（東京都杉並区）

宮柊二記念館長賞・・・八首

浴槽の掃除をしつつ思ひをり死はごぼごぼと来るかも知れぬ
中村重義（福岡県北九州市）

代田（しろた）いま水たいらかに満たされて水無月十日の夕月ふたつ
平尾三枝子（岡山県岡山市北区）

補助輪を外しし銀の自転車がゆらゆらとゆく日ざかりのなか
加藤久子（神奈川県足柄上郡）

コロナ禍に自粛の祭り再開を言ひ出す者無き過疎の村なり
渡邉照夫（埼玉県鴻巣市）

脱皮した蝉がここにもドアノブに児の手届きて朝を押しゆく
畠山みな子（宮城県仙台市）

露天湯の床（ゆか）に黒蝶ふいと来てぺったり伏して寝てしまったの
大塚とみこ（群馬県高崎市）

水田と越後三山に挟まるる緑の帯にわれらは暮らす
磯部　剛（新潟県魚沼市）

遠き日の三角野球のヒーローが三本足で図書館に来る
星野武二（新潟県小千谷市）

秀逸（一）・・・五首

大雪に凍てし白菜幾畝をトラクターが鋤き鳥ら群がる　尾原永子（富山県黒部市）

柄じゃない　遺影に空（そら）の背景をあてがわれたる飲兵衛の友　中村英俊（北海道伊達市）

しゃふしゃふとしゃふしゃふしゃふと母さんは林檎食みます持ってきてよかった　大西令子（兵庫県高砂市）

この墓に次に入るは我だろう黒ずむ石をブラシで磨く　小畑定弘（徳島県阿南市）

わが髪を撫でて去りにし君の名を逝去欄にみる初雪の朝　滝沢千鶴子（長野県松本市）

秀逸（二）・・・二十五首

落鮎の寄りゐるところ哀(かな)しくて川の底まで風の音する　北村純一（神奈川県厚木市）

籾がらを燃やすけむりの雲となり越後平野のいまし暮れゆく　眞庭義夫（群馬県利根郡）

客用の羽毛布団を押さえ込み小さく小さく仕舞う「正月」　加藤三知乎（福岡県久留米市）

重力の形にひづみ造成地の水たまりみな水平に照る　井田善啓（群馬県高崎市）

挿し苗のピンに浮き雲留めつつ峡の水田は目を見張る青　藤井重行（山口県宇部市）

ヨチヨチと歩くをみづから嘲ひつつ卒寿は卒寿よと悔ひなく嘲ふ　若林久子（兵庫県神戸市）

「七万羽鳥インフルで殺処分」里の小さな記事の大事件　上田康彦（千葉県四街道市）

戦知らぬ歌手グループが胸痛む軍歌をうたふ折目正しく　武藤幸子（栃木県宇都宮市）

岳樺のピンクの樹皮に触れながら君と越えたり焼山峠

磯部　剛　（新潟県魚沼市）

ちちのみの父が語りき一度だけ酔いかたまけて戦争（いくさ）のはなし

須賀登喜雄　（千葉県四街道市）

人生で二度目の保護者手を引いて施設のバスに父を誘導す

中村英俊　（北海道伊達市）

拾ひ来て埋めしどんぐり軒を越え子は三人子の父となりたり

渋谷和子　（新潟県新発田市）

三本鍬力で引けばごろごろと土の中から男爵あらわる

渡邉正夫　（千葉県我孫子市）

わが生に掴み得しもの何なりや曲れる指をさする雪の夜

関川洋子　（新潟県小千谷市）

バス停の時刻表示の空白がどんどん増えてゆく町外れ

後藤　進　（岐阜県岐阜市）

四手網もちて二月の魚野川かじか捕るらし男かがめり

五十嵐トシエ　（新潟県魚沼市）

春はただ寒緩むことあとはただ別離の匂ひ沈丁花咲く

石塚明夫　（東京都八王子市）

早送り映画を観てる心地する若さは少し窮屈だった

濱岡　学　（京都府宇治市）

青稲の波立つ中を過ぎて行く普通亀山二両編成　田中亜紀子（三重県津市）

ひらひらと掴まり捜して歩く母まだ杖はいらぬと言ひ通す　木村マチ子（愛知県名古屋市）

生乾きの大鬼瓦に何彫るやをみなは白き軍手を塡めて　若月昭宏（新潟県新潟市）

携帯が見つかりましたとライン来てわれによく似た娘と思う　磯部　剛（新潟県魚沼市）

をさなごはシャワーの虹に触れられず少しこの世のありやうを知る　小金森まき（千葉県千葉市）

新しきアスファルト道を駆けてゆく花びらのやうに孫入学す　中村仁彦（福岡県宗像市）

人の列臨時検査のプレハブにシールド付けし看護師走る　松井孝憲（愛知県豊川市）

佳作・・・四十一首

腕章に階級章も取外し甚平に着替え小舟に移る　安藤悦男（埼玉県深谷市）

飛行機の窓のむこうは星月夜カンパネルラの列車が見える　野上　卓（東京都世田谷区）

医院出て日傘廻して再建の首里城を見て波上宮（なみのうえぐう）　六月朔日光（福岡県福岡市）

糸我（いとが）稲荷に白河法皇立ち寄りて安全祈（ね）ぐを知る大楠（くすのき）は　安田眞琴（大阪府岸和田市）

母が逝き戦死の叔父の若き日々語れる者なく叔父は二度死ぬ　米谷　茂（兵庫県神戸市）

やわらかき真綿のふとんに包まれて姫のようなる空豆の粒　松井純代（奈良県橿原市）

無花果は一人居のわれと知りたるか日に三果づつ律義に熟（う）るる　皆春（大阪府羽曳野市）

街路樹のけやき若葉の萌え出づる百歳めざす活力の湧く　窪田文雄（千葉県松戸市）

あやとりの川より橋へいくたびとここで行止まる亡き娘（こ）の夢は　山崎蓉子（千葉県市川市）

気が付けば十二も釦が並んでた急に見慣れぬ洗濯機になる　中屋敷　歩（北海道函館市）

真夜中を鶏（とり）の騒ぎにひた走る懐中電灯に雨足ひかり　井田徳子（群馬県高崎市）

湯むきするトマトの皮のうすさほど老いに傾くさみしき今日は　川出香世子（岐阜県岐阜市）

初物の苺の三つぶ供へしが減らぬいちごに母をかなしむ　吉仕節子（新潟県長岡市）

笑ってる泣いてる手を振る汗ぬぐうアンコール前の鼓組の生徒ら　横森武子（千葉県八千代市）

会ふたびにあなたが遠くなるようで赤いチューリップの切り絵をわたす　櫻井　静（埼玉県さいたま市）

使はなくなりて久しき紙の辞書柩に入れてと子に言ひておく　広田澪子（東京都府中市）

夕べまで凜々しき姿の点滴台役目を終へて隅に小さし　西村好美（富山県黒部市）

おっとっと畳のへりに躓けど慣れし体は転ばずにすむ　大沼二三枝（山形県鶴岡市）

呑んだ時忘れぬように書き記す箸の袋に三十一文字を　須賀登喜雄（千葉県四街道市）

職退きて三十余年戯れに算盤弾く手は衰へず　渚　希久生（新潟県村上市）

あとひとつアウトを取れば勝ち試合逸る気押さえ一球あそぶ　近藤國法（宮崎県日南市）

大青田溝切る青年小さく見ゆ曽ての棚田姿留めず　山本美代（新潟県魚沼市）

「祖父（ぢい）ちゃんが座った跡が残っとる」何時（いつ）か言はれんソファーのくぼみ　西山博幸（福岡県大牟田市）

ふくよかな涙袋をした君を泣かせまいぞと胸に秘めたり　多田木まさのり（栃木県小山市）

冬の夜にフリスク一粒舌に置き息吸い込めば遠き雪嶺　池内早月（東京都大田区）

葉書には野草の花が描かれて癌の検査は無事でありしと　後藤　進（岐阜県岐阜市）

水無月や梅干し容器の中蓋にのこる住所と名前は母の字　大熊佳世子（茨城県鹿島市）

齢（とし）古りて今きっぱりと言えること　恋は錯覚　愛は理不尽　添島貴美代（愛知県名古屋市）

補聴器の電池を変えて出席す県人会に暑きひとひよ　渡辺リツ（東京都大田区）

紫陽花は雨の降るごと色めきて恋してるらし年頃の姪は　宮澤栄子（新潟県上越市）

園児らがママのお迎え待っている吾はお迎え待ったりしない　樋口　勉（和歌山県海南市）

二十日間の入院済みて駐車場にわれを待ちわびるわが車おり　斉藤真木夫（新潟県上越市）

あじさいは水のうつわよ卓上の一朶の藍の深まる雨夜　加藤久子（神奈川県足柄上郡）

平皿に盛られし鰯海のいろ塩のひと粒きらりと光る　井上由美子（愛媛県松山市）

左手で右手を支えて背のびするリウマチの我の朝（あさ）のはじまり　佐藤吉子（新潟県魚沼市）

つけ忘れはづし忘れて又笑ふ入れ歯は二人の潤滑油です　本間純子（新潟県長岡市）

老い夫のうたたねの間に若人の恋人つなぎそっと試したり　石丸優子（新潟県長岡市）

三つ編みの結びほどくやひんやりと背を波打ちし十五の黒髪　横田淑子（新潟県燕市）

行列の末に並べば吾が後ろまた人増える時の楽しさ

松田容典　（和歌山県和歌山市）

過ぎてゆく桜前線わたしたちまだ唇を隠したままで

芍薬　（千葉県千葉市）

くちあけて眠るおとうと憎たらし微笑みはじめてなお憎たらし

枝豆みどり　（愛知県名古屋市）